

# 砂名の ベトナムに乾杯

## 第30回 <sup>しま</sup> 終いどきと引き際について考える

「日本人婦人会アオザイ会」は、ホーチミン在住の日本人女性会員の交流の場として1995年に発足されました。会員資格はホーチミン市または近郊に住む日本人女性で、主婦、仕事を持つ女性、日本人の配偶者を持つ日本国籍以外の女性、およびアオザイ会の承認を得た女性が対象となります。と、このコラム Vol.15でも書かせていただきました。

しかしコロナ禍で、活動を大幅に制限されました。さらに8名で運営していた役員も、帰任、異動などでオンラインでの打合せが続ぎ、毎年交代する役員が二年続投する異例の事態になったのでした。そしていよいよ三年目を迎え、新役員募集の時期となりましたが、立候補する者もおらず、推薦を辞退される方ばかり。アオザイ会を今後続けてゆくかどうかアンケートが行われました。私は「継続希望」の3人のうちの一人でしたが、大方の意見は「アオザイ会の活動休止」でした。

こうして23年、およそ四半世紀に渡って続いた「アオザイ会」は実質解散、幕を下ろしたのでした。これまで先輩たちが継いで来られた会を、自分たちの代で幕引きをするという決断をするのは大変なことだったと思います。先日、最後のランチ会に参加させていただきました。すこぶる残念ではありますが、「時代は変わったのだと思います」役員の方たちの、清々しい表情が印象的でした。

さて私ごとですが、そんなことがあった



アオザイ会最後のランチ会は Thu Duc City (旧2区) の「Mia Saigon Luxury Boutique Hotel」での開催でした。ホーチミン市内とは思えない静かで開放感あふれるリゾートホテルのレストランです。

からでしょうか、コロナの影響でしょうか。

強い想いと勢いでホーチミンに来てはや6年と8ヶ月。当初の事業計画も第一、第二ステップをひとまずクリアし、いよいよ最終段階に差し掛かりました。この最終章は正直、終わりが見えません。ですが自分の意志が及ばぬところで突然、明日死ぬかもしれない…ということを考えるようになりました。別に気持ちが後ろ向きになっているわけではなく、今をよく生きるための冷静な思考です。誰しも明日の命は分かりませんし、明日は我が身です。駐在員の方は不測の事態が起こっても会社がすべて面倒を見てくれます。ですが私のようにどこにも属さず、一人で起業して独り暮らしの者はどうなるのだろう。

不慮の事故死や病死の場合について、お茶を飲みながら家族と話したことがあります。90歳の母は「現地で茶毘に付してもらってね」と、こともなげでした。いかにもドライな母らしい。しかし角打ちと酒屋はどうすれば良いのだろう。サービス

アパートメントは？ 銀行口座は？ 預金や遺品は？ 日本には孤独死した人たちの後始末をする（特殊清掃）業者さんがいます。欧米でもあるようですが、ベトナムではどうでしょう。

以前、お一人様同士のコミュニティーを作りませんか？ と提案された方がいました。常時連絡を取り合い、不測の事態にもみんなで対処しようという意図だったと思います。またお世話になっている不動産屋さんに尋ねてみると「最期のことを相談された方は初めてです」と少し驚かれ、もし希望するなら、遺書をしたため公証役場で手続きすると良いと勧められました。そうは言いつつ、帰任されたお客様たちが次々と「子供が生まれました！」と SNS で投稿しておられるのを見て、生まれたばかりのこの子たちが、成人して飲みに来られるのを楽しみに、あと20年ぐらいは角打ちを続けながら、毎晩日本酒を飲んでいそうに思います。



月森砂名(つきもりさな)

奈良県出身。同志社大学卒業。2015年、ベトナム初の角打ち【日本酒で乾杯!】に続き、2020年、Pham Viet Chanh にて日本酒専門の「角打ちのある酒屋」【蔵 KURA】をオープン。経営に携わる。東京で舞台撮影や制作の仕事をする傍ら、作家活動を行う。2009年よりNPO法人 Layer Box にて、日本の伝統文化について、大学、高校、専門学校とともに、PV、3D、CGなどのコンテンツ制作および世界発信を行う。